神教歌譜

全

6
168

東京圖書館

類	屬	函	架	号	冊
		六	四	一六八	一

權大教正權田直助編述

神教歌譜

版權免許

明治十四年一月廿五日

東京帝國大學圖書之印

神教歌譜そもそもかきそ、世にある人社、教會講社の祭典、家靈祭などゆをりゝ、もそらう或は葬ときもゆを、天能宇受賣命のうゑひ給ひし神歌ばのわ、勝社多數そなら夏。其は、ちちやがる神社みゝろ祓和し、何くの數〳〵魂を鎮免、うゆをみそのの禍をゆをさ、玉きゝる命をゆば〳〵、幽世社幸祓願はむ小、奇くなふゆき驗あ祓實あり。まゝ、古社

權大教權田直助編述

神教歌譜

版權免許

明治十四年一月廿五日

東京帝國大學圖書館藏

そ、世にある人社、教會講社の祭典、家靈祭などゝ社をりゝ、もそらう
きもみを、天能宇受賣命のうゐひ給ひし神歌ばゝのち、勝社多數をなら
は、ちゝやゝなる神社みゝろ社和し、何く
ごの歌ゝ魂を鎮め、うゐ社をみの禍をみぞ
玉きゝる命をみば、幽世社幸社願はむ
ふ、奇くたふゝき驗あ社實あり。まゝ、古社

歌の中にも、此の神歌をつぎて、平常ふ、う
ゐにおもひあがきたるもの、少からず。其は、皇神
を祭りあがき魂をあがめまつる心、世安定の後
の世世祈り、或は、君臣のらをつゐ、父子の
志あるしみ、夫婦おなじうらに、長幼の序ゐで、
朋友のまじらひをそこなはで、神教の旨
をけがせるもの、多けれどなり。然るに、世
の人皆をゐざなひ導きて、ゐそゆゑ、敬神
の心を起さしめ、愛國の志を立しむるも、

此をもて教ふるばかり、捷徑はなし。自か
し吾権大教正權田老翁はも、かねて、意を
此に留まらせけらし。かの神歌をとりあつ
しも、あゆゐつわふのあまる古歌をえらみ
集へ、はるかに世ならきのうなひもゐを移を
考へ合せ、ふみ、ぶのらふづけしも、人々
ふ教授をらせけり。はじめ、爺嫗歌譜に題
けも、もはら、老人ふうはならはしむ
為なり、そのせらせるまを、今は、老人ふ限

らぶ、廣くうゑひ習はしをも、吾惟神のみ教を世に知らしむる、みちびきの料ふみの心をもひろめ、神教歌譜ゆは、更ゆらきたれるなりける。おの社、同じくろ社人々ふつたらひも、最きふ、其の傳習をえて、此社書のはじめ社題號ふ因もて、まづ、村里の爺嫗ふうゑ習はしめ試みるふ、速ようべすもそりて、受けまるびつつ、教會ふ、祭儀ふ、みな用うゑこゆ成れり

けるゆ。げふ、教法の捷徑を云はむも、誣言に非ぬ証、すべくふを。いつゆで、世に遍くひろむる由もゆを、思ふをりしも、同じ心の人々、西より、東より、此のふみの上木をうなゆしおらせ力をもて、其社草稿ゆらび出しも、かくおほやけふすゆらゆをなりる。あはれ、此書ゆつぎつぎに行はもも、此の法のひろくゆき渉もるらましかば、遂ふ、世社人みる社、敬神の心を定

色愛国孔志ゆゑのうるを見て、彼此なるのごがさ
ぎりふ、立ままふなるぎもなく、やそなちま
ふ、踏みなる舞をふうれるみもなるうま
ゆそるうこばひ思ふあり、有るつる
條々を書きつづけて、此は端詞をものし
あるふなる。明治十四年云ふ年五月
二十余日七日の日、萩原正平つしみて
識す

東京帝国大学図書館

神教歌譜

權田直助編述

書ハ、教會講社、其の他、老年の男女なるべ、後世安
頼ハ、む爲に、神を祭り、或ハ、喪家靈祭の席なるべ
に、會集せる時に、うたふ歌の譜なり。抑歌をうたひ
て、神慮を慰め、幸福を祈り、靈魂を慰め、冥福を得し
めむ為する、必、其の法なるべ。其の法ハ有るべからず。
先、樂器を製に。其ハ、割笏を、二つに割りたるなり。木
ハ、蘭櫻なるを用う。無き時ハ、何の木にても
略をして、簡易に造る。笛和笛を用う。樂人の用もう
師、笛師、會長を定む。歌長ハ、衆人に先だちて、歌を發

げ、笏拍子をうちて、歌の節を調ふる者あり。鼓師ハ、笏拍子に合せて、鞨鼓を鼓ち、笛師ハ、笛を吹きて、拍子を助くる者あり。會長ハ、會場一切を、總掌指示に、する者あり。これ等ハ、時事に習熟せる者を、豫ねて撰びて、定むる、然て又、同友言ひ合せて、或ハ、三四人、若くハ五六人、時々會集して、或ハ、歌長ゟあり、或ハ、鼓師ゟあり、笛師ゟあり、會長ゟありて、相互に、拍子をゟり、歌をうたひて、其の事に、練熟せむ事を要すべし。但、笛師無きゟきハ、闕くも妨げなし

○修行式

豫て、會席會日を定め、時刻を期して會集し、床上に、神号幅をかけ、榊を、其の前に立て、酒、洗米、水、塩、菜等を供ふ

靈祭にハ、靈璽、若くハ、靈号幅をかく。其の他ハ、上に同じ

初座

第一、會長、一の拍子木を打つ事三段、會衆之を聽きて、各用意に

第二、二の拍子木を打つ事三段、歌長、鼓師、笛師、之を聽きて、立ちて神前若くハ、靈前に進みて、並び坐に。歌長ハ中、鼓師ハ左、笛師ハ右、次に、衆人進みて、其の後に、幾並にも並び坐し、各一拝に

第三、歌長拜をして、手をつき、祓詞を發ぐ、衆人、同音に申に。其の詞に曰く

はらへゝのおわがみたち、もろもろのつみけがを、はらへたまひ、きよめたまへゝまをに。もろもろの、ゝがあやまちを、はらへたまひ、きよめたまへゝまをに

右、三遍申して、拜を兩度して、手を四つ打ちて、また拜をに

第四、各祝詞を申に。作法上に同し。其の詞に曰く

かけまくもかしこき、あめのみおかぬしのおわおみ、たあみむすびのおわがみ、かむむすびのおわがみ、あまてらすおわみかみ、おわくにぬしのおわがみ、○○○のおわがみ、○○○の神を祭るゝき、其の神号を所に申また、うぶすなのおわがみ、直に、神号をすもよしやわよろづのかみのみまへを、まつりまつらくを、たひらけくきこしめせゝまをす。やすらけくきこしめせゝまをに

右の如く申して、前の如く拜をして、手を拍つ

靈祭にハ、何〻の、諡の、おきなおわらつこ、いらつこ、わくご或ハ、何〻のおわらじ、おわらつ、をゝらつのみまへを、云〻ゝかへて申にべくし

第五、皷師、發皷を三段うつ

第六、歌長笏拍子をうち、祓歌を發ぐ、衆人、次ぎてうたふ事三遍、次に、神歌をうたふ事各十遍、次に、祭歌、願歌、定歌、各三遍

第七、皷師、收皷を一段打つ。又、會長、拍子木をうつこゝ一段、衆之を聽きて、一拜して、下席より徐に退去一休に

後座

第一、一の拍子木を打つ。衆皆用意に

第二、二の拍子木を打つ。各祭場に進み、初の如く列坐、一拜に

第三、發皷三段

第四、歌長、重歌を發ぐ。衆同音にうたふ事二遍、次に、長歌隨意、次に、短歌隨意

靈祭には、其の條に擧ぐる所の、祭歌より始めて、其の事、其の時に應へて、歌を定めてうたふべし

次に、神歌各十遍

第五、收皷を打つ事初めの如し

第六、祝詞を申に。其の詞に曰く

いはまくもかしこき、すめがみたち、いへぬち、たひらけくやすらけく、まもりたまひ、さきはへたまへ、ゝまをに。このよのちのよ、たすけたまひ、す

くひたまへ坐ますに

右畢りて、拜をして、手を拍つ事初の如し

靈祭にハ、何〻諡のあらみたま、にぎみたま、たまくいつくしく、おはしませ坐ますに。くしみたま、きみたま、くすしくさきく、おハしませ坐ますに、坐申にべし

第七、拍子木を打つ。衆皆一拜退去に

以上

○神祭祓歌

みづそこまできれいにながれるかはのごとくさやかにはらへをすることを、神もおきゝくださるデアラウ

そこきよみ　ながるゝかはの　さやかにも

はらふることを　かみハ　きかなむ

此の歌ハたゞ、聲おらし坐意得て、うたふべし

神歌

ひふみよいむなやこと坐ちら

ひとふたみよ　いつむゆなゝ　やこゝのとを
もゝちよろづ

凡ふしづけハ、字の肩につけたるハ、調子を上ぐる所、字の腰につけたるハ、調子をさぐる所、字の腹につけたるハ、調子を平らかにする所、又、長くしるしたるハ、聲を長く引く所、短くしるしたるハ、聲を短くつむる所、屈曲してしるしたるハ、歌ふしなり。又、字間に系を引きたるハ、走らせて早く歌ふ所なり。又、右に・點をつけたるハ、笏拍子なり。左に、点をつけたるハ、鞨鼓の拍子なり。笏ハ、四つ拍子、鞨鼓ハ、八つ拍子なり。笛の手ハ、煩ハしけれバ、しるさず。次々の歌も、之に倣ふべし。此の二首の歌をうたハむハ、一遍ハ、調子を平かに、一遍ハ、調子を上げ、打交せて歌ふべし。幾遍も幾遍も、くりかへし、數多く歌ふを善しとす。如此て、此の歌はしも、此の世の始めの時より傳れるものにて、魂を鎮め、性命を保ち、災難を避け、幸福を招ぐ、最貴き神咒なり。然るハ、天照大御神の、天之岩屋に隠り坐しゝ時に、天之鈿女命、其の岩屋の前にて、此の歌をうたひ、舞を舞ひ賜ひしによりて、大御神の御心も

和みて、岩屋を出で賜ひ、又、朝廷にて、毎年行ハせ賜ふ、鎮魂祭にも、此の古事に從りて、鈿女命の裔孫なる猿女君に、此の歌をうたひ、舞をせさせ賜ふをもて知るべし。然るを、豫く物の數数計ふる名ぞ成れるハ、世の中の人に、知らば知らば、毎日唱へさせて、無事平安を得し免むぞの神慮を以て、然ハ、定め賜ひしものなり。然る故ぞ、神前に向ひて唱ふるぞきハ、神慮を慰免、身の幸福を得、靈前ぞ向ひて唱ふる ぞきハ、靈魂を慰免、冥福を得し免、亦身の災難をも免るべし。況や上の古事を學び、曲節をつけて歌ふをや、必、靈驗あるべきなり。各〻其の意を得て、數の名ぞのみ思ひて輕むる事無く、厚く信じて勤免行ひ、此の世後の世、無事安全を求むべきなり

神まつりをするこのやどにけふさーたてゝそなへタさかきのいつもかはらぬあをきはのうへにまツーろナゆふーでをかけタノはザテモ〜〜うるはーイものぞヤ

祭歌

かみ　まつる　やぞに　けふさす　さかきばの
ぞきにかくる　やべのゆふしで　やべの
ゆふしで

家集

神のおまへにかウーてたてまつるみてぐらはわれ〳〵がノでハあノませぬ天上においでなされる豊をか姫の宮のみてぐらチヤ

おろかなるわれ〳〵が身をヤ神におまかせまウーてねてもおきてもぜひと

みてぐらは　わがにハ　あらじ　あもにます
ゆよをかびもの　みやのみてぐら　みやの
みてぐら　神樂歌

願歌

さゝ　ゆも　ねて　さもでも　たのむかな

もとおたのみまウすことヂヤワイナア

この世をさツタのちの世へもちろんこの世にかウーてゐるうちも神のおみちびきでまよはぬヤウにーたイモノヂヤ

おろかなるみを　かみにまかせて
まかせて　新拾遺集
のちのよも　このよも　かみの　おるべにて
おろかなるみの　まよハずもがな
ずもがな　續後拾遺集

これまで、佛のでーとなツてゐタなれども、よく〳〵かんがへてみるに、おろかなる身にーては、のちの世ハもちろん、この世にあるうちも、神におまかせまウすがだいいちのたのみであらウワイ

此ノ歌ハ法印源信ノヨメルナリ

定歌

のち　のよも　とのよも　かみに　まかするや
おろか　なる　みの　たのみ　なるらむ　たのみ

新拾遺集

以上五種ハ、何祭にても、例ゝして、必歌ふべく、以下の諸歌ハ、時宜に從りて、歌ふべきもの也意得べし

御神徳のだいたツとイことハあをでものゝ〳〵に、たかくひイでゝたてる阿夫利の山をあをむーてみてもーるがよイ

ヒョツとわすれてなりとも、わるイことハせぬがよイ、阿夫利の神の山のいたゞきのだかイところから、つねにごらウトて、おいでなさるダラフホドニ

諭歌

あを　ぐも　の　うへに　ひでたつ　あぶりやま
あふぎてもしれ　かみの　みいづを　かみの
みいづを
わす　れても　あしき　こゝろす　あぶりやま
をの　へのかみの　みそなはすらむ　みそなは

阿夫利の山をたかくーろーめーて、おいでおされる神の、おめぐみをうけんと、おもふならべよいことを、つねにくーろにかけてするがよイ

すらむ

よき　こゝを　かけて　つゝ　あぶくやま

たかしるこのみの　めぐみ　おもはゞ　めぐみ

おもはゞ

吾が、大山敬慎講社中にて、上の五種の歌と同じく例にして、此の三首の歌をうたひて、神慮を慰むべきなり

世の中の人のがいのうまウすこゝろもーんとつにーて、だうりにちがハぬものならバ、それをよーしとおぼーめーて、神もおうけおされるであらウ

重歌

みなひとの　いのる　こゝろも　こゝろ　わかに

そむのぬみちを　かみやうくらむ　みなひとの

いのるこゝろも　こゝろ　わかに　そむのぬ　みちを

かみやうくらむ

玉葉集

ひさかたのたかまのはらより

おくだりゐされタ神のみことヨ

おく山よりそりとゾてきタ、さかきのえだに

きらかづくゆふーでをとりつけて

長歌

ひさかたの　あまの　はらより
あれきたる　かみの　みこと
おくやまの　さかきの　えだに
きらづくゆふ　でをつけて

さけをかめに入れてみまへにすゑおいて

竹玉をかずゐほくいとにつらぬイてかけたらーて

鹿のヤウにひざををりふせて

女のきるおすひをきて

このヤウにさ、ごろをコくーておれハおいのりまウす

いはひべを　はげすゑ
たのだまを　ぬきたれ
ちはじもの　ふせて
たわやめの　ゐりかけ
かくだにも　ひ喰ふも

つひに〳〵神に、おあひまウされるデあらウワイ

われハおいのりまウす何事もよきヤウにおまもりくだされ

コヽニ□ヲ印シタルハ、枕詞ニテ、歌ノ趣意ニ係ハラズト知ルベシ。以下コレニ倣ヘ。

きみにあはじかも

きみにあはじかも　万葉集

此の歌○を印せる二句ハ、ひのむ、さきくまもらせ、かへてうたふべし。さて、長歌ニハ、大長歌、小長歌等ありて、句數定うなしこゝのふーづけハ、五七二句づゝに調へて、末の二句のみふーをかへたれバ、長き歌にても、短き歌にても、自在に歌ハるゝ。但、初の一句の音を下く、末の二句をこのふしづけの如くにうたひ收むべきなり。次に擧ぐる歌をも、試みて知るべし

まウすもおそれいるばかりだッヤー

所ノ名ナリ

うちひさす　おほうちに、おつかへなされる人たちハ

あさひのかゞやくヤウに、うつくーイ

ゆふひのてるヤウに、うるハーイ

かけまくも　あやにかしこき

やまのべの　いそのかみ

うちひさす　おほみや　はらにづのべ

あさひるす　まぐ　はしも

ゆふひなす　うらぐ　はしも

はるやまのはなのヤウに、さかえて

あきやまのもみぢのヤウに、なつかーイ

もゝーきのおほみやびとは

いつまでもかはることのなイ、天地日月とゝもに

むぎりなく、おつかへなさるヤウにありタイものヂヤ

はーるやーまの　さーかえて
あーきやーまの　いーろなつ
もーゝーきの　おーほみ　ひーぜ
あーめつーちぜ　ぜーもに
よーろづよーにぞーも　よーろづ
よーゝーぞも

万葉集

。たつがなく東京の天宮

このみきハ、わゴみきでハなイ、日本をふたゝびおつくりなされタ大物主神の、おかもーなされタみきヂヤ

上に言へる如く、初の一句ぜ、末の二句ぜに、心を用ゐて歌ふべし。何の歌も皆同じ。さて、此の歌、○を印したる二句を、たづがなく、ちよだのみやにぜ、更へて歌ふべし。時にかるひてよー

直會歌

このみきハ　わゴみきならず　やまぜなす
おほもの　ぬしの　かみしみき

いくひさ

年のはじめに、このヤウに、みきをくだされて、八千年のすゑまでをかねてたのみをつくさウカイ

いくひさ　日本紀

あたらしき　ぞのはじめに　かくしこそ
ちぞせを　かねて　たぬしきをしも
いくひさ

いくひさ　古今集

此の歌ハ、祭事畢りて後、直會ぞ云ひて、神前に供奉り置きたる、神酒ぞを撤げて、各〻賜ハる時に、うたふ歌なり。終りの「いくひさ」ハ、壽詞なれバ、一首の歌をうたひ終りたる時に、各〻、手を拍ちなゞら言ひて、祝ふべきなり。後の歌ハ、一月ならバ、本のまゝ歌ふべく、他の月ならむにハ、○を印したる初の二句を、かみまつる、げぶのいくひにぞかへて歌ふべきなり

靈祭

先、神祭ぞ同じく、祓歌、神歌、をうたひ、次に、次條の祭歌、次に、上に出せる願歌、定歌を、例ぞしてうたひ、さて後に、下に出す歌ぞもをうたふべー

人の、にてのちは、そこはかとなきもふたらずやそのくまぢをさーてゆくものヂャときけバ、そこにたむけーて、いのツタなら、バもーもその人にあふこともできヤウカイナア

ともーてあげる火もたむける水もまことのこゝろをもッてさゝげタならバ、なき人のたまーひのゆきがたをトるべきヤウもあちウカイ

祭歌

むーたらず　やそのくまぢに　だむけせバ
すぎにひぢに　けだトあはむかも　けだト
あはむあも　万葉集
ぢも　すひも　たむくる　みづも　まとぢあらバ
たまのゆくへを　ゐるよトもがな　ゐる

よーもがな　夫木抄

此の二首ハ、何の靈祭にても、始めにハまづうたふべし

初日祭

まき　ばーら　ふぢき　こゝろバ　あゝかぢ
しのわがてーろ　ゐづもかねづも　ゐづも

われもつねにハまきばーちシッカりとータ人なみのこゝろハあッタけれども、大事の人にわかれて、こゝろがきわきたッテドウシテもどゝーブあることができなイワイナア

あまざかる さびしくおらく野中に大事の人をはうむりておいてきて其の事をおもひてわれハわれもまたいきてゐるともおもハれなイワイ

かねつもの　万葉集

あまざかる　ひなのあらぬに　きみをおきて
おもひてあれバ　いけりとも　なし　同

三日祭

イヽハさウならバーかたがなイまたとある きあれでなけれバわがなくなみだもけぶみンなきツてーまツてくれ

ときぐいさかのつらイてとのあダノをもナゼにマスアノヤウになけイタデあックラウやがてこのヤクに人のなくなッてシマウをきゐあれバあることデヤワイ

よしさらバ　とのたび　つきね　わにがなみだ
まだもあるべき　わがれならねバ　おもれ
ならねバ　續千載集

をゝをゝの　つらさを　なに　なげきけむ
やがてなきよも　あれバありけり　あれバ

人ハよーやおもひきッてシマウともわれハヤツパり中まがつらおもかげにみえ〳〵ーしてドウシテモわすれられなイワイナア

あり けり

詞花集

十日祭以後、百日祭に至るまで、通ッて これを用う

ひさ かた よし あも びも やむ ぞも やま がつら こ

かげ に みえ つ わす らに えぬ かも

えぬ ども

万葉集

人にさきだ〳〵ぬくやーさのいく たびも〳〵くりかへされてかなーイものハひとたびながれて ハまたとかへることのなイ水のヤウになッてシマッタ人チャワイ

人のぶくハかぎりがあれバぶくゆきタふちころもへけふすでぬイてシマ

さき だ ぬ くい の やち たび が なに きば

なの る み づ の か り こ ぬ なら

古今集

忌明

が ぎり あれ ば け ふぬ き すて つ ふち ごろも

ツタきてぬイデシマツて
もなほはてーのなイもの
へわがなみだヤワイ

一首ノ意明ナレバ注セズ

はてなきものハ　なみだなりけり

なみだなりけり　拾遺集

一年祭

わかれにしそのひばかりは　忘れきで

いきもかへらぬひぞこひしき　ひぞ

こひしき　後拾遺集

ゆめのヤウニきみが世をさツタその月日がめぐツてきてはゆこひしなふむかしとがツタことカイナア

ゆめのよのつきひの　忘れきで

えのぶむあしぞ　なりにける

けるかなな　新拾遺集

三年祭

けふまでもうイつらイことハ身にそッてゐる世の中のならハーなればや、三年になッタなれどもヤッパリ、なみだにぬれるそでのつゆのかわくまもなイワイ

ソノ意明ラカナレハ注セズ

けふ　までも　うきは　みにそふ　さかなれば
みぜのつゆの　かわくまもなし」　かわく

續古今集

まもなし

をー　むべく　かなしむ　べきは　よのなかの
すぎてまたこぬ　つきひなりけり」　つきひ

なりけり

玉葉集

むかーにかへることのなイ世の中のみちのかなしイことハサいくねんもかさなるどーのおもひのやりどころがなイ

十年祭以後、何年に限らず、これを用う

しに　しに　かへらぬ　みちの　かなしさは
かさなる　ぜーの　やるかたぞなき」　やる
かたぞ　なき

家集

右の歌ども、何日何年なども分ちてハあれども、其の歌ふ限りて、他の歌をバ、歌ふべからずなどと云ふにハあらず。附けてハ、何の歌なりとも、意ふ任せて、取り出で、歌ふべきなり

長歌

わがやどに　はなぞ　さきたる
そをみれど　こゝろも　ゆかず

わが家の庭にはながさいタワイ
そのはなをみてこゝろをやらウとしてもサウもならない

はきやどに　いもがあげせば
みかもなす　ふたりならびゐ

かハゆイつまがあツたならバ
みかもなす　二人ならンでゐて

たをりても　みせまほしもの
をゝとッてもみせヤウものを

うつせみの　かりの世の
うつせみの　かりの世の人の身なれバ

つゆじもの　きえゆくが
みるれば　ごとく

露霜のヤウにきえてシマツて

あーひきの山路をさーて

入る夕日のヤウに、かくれてシマツたれバ

そこをかなーみおもふに、むねがせまツていたむワイ

いひヤウもなく、名のつけヤウもーられぬ

あとかたもなイ、世の中となツたれバ

あしびきの　やまぢを　さーて
しーりびなす　かくれ　たしかーも
そこもふに　むねとそ　いたも
いひもえず　なづけも　ちらに
あ[illegible]もなき　よのなか　おれば

去ヤウがなイハ、サテ

せむすべもなし　せむ　すべもなし　万葉集

此の歌、神祭長歌の下に注へる如く、初の一句と末の二句とに、意を用ゐて歌ふべきなり。さて又、○を印せるいもの三字を、きみのとかへて、妻に限らず、何にても、廣く用うるを宜しとす

篇中、載する歌とも、短歌長歌、重歌、直會歌等の別あるのみにて、曲節は、皆、同じけれバ、悉に、ふしづけするにハ及バざるべし。然ハあれども、歌にもりて、曲節拍子に、少づゝの差別ありて、歌ひ馴れさらむ

限りハ、熟くうたひ得難からむ事の老婆心なり、如此ものせるなり。そハ、同ト七言の句にても、或ハ、上四言、下三言ふ分ちて歌ふべきあり、或ハ、上三言、下四言に分ちてうたふべきあり、或ハ、字餘りて、五言なるべき所、六言なるあり、七言なるべき所ハ言なるあり。然のみならず、長歌ふは、七言なるべき所、六言、或ハ、五言ふなれるさへありて、曲節の延約、兎に異なるものあるゆ故なり。難むるこゝなれ。

さて、如此ふしづけたる歌ゝもを、熟く歌ひ習ひたらむ上にハ、次に擧ぐる歌ゝもをも豫く歌ひ試み置きて、時ふ應へて歌ふべきなり

わが父ハへゞまで年もよらざれバまた世にあらバあるべきよはひであつタノにとおもふにつけてなほくこひーイワイ

ほかよりかへツてきてハなにようさきに父ハのまへにでゝあツタものをなくならシャツタばふようしてハたれにマアあハうとするゲラウカ

親戚新喪

人或ハ、父母ふ別れ、子を失ひ、或ハ、夫ふ後れ、妻ふ別れしものあらむに、其の時に應へて、うたハむ歌ゝもを、類を分ちてとゝふ擧ぐ

父母

たら　ちねの　あらバ　あるべき　よはひぞゝ
おもふにつけて　なほぞこひーき　なほぞ
こひーき　續拾遺集

かつ　りてハ　まづ　たらちねを　みーものを
けふハたれにか　あハむゝすらむ　あハむゝ
すらむ　玉葉集

父ハ、のさきだゝジャツタあとに、のこツてゐて、なまま、まつりの、ふえのこゑをきけバ、いとゞあはれがまさツて、人にもしられぬ、一のびなきに、なかれることヨ

くさのすゑへのつゆのごとく、たのみにすべきわが子をさきだてゝハ、はかなきあとにのこツてゐるわが身の、おきどころがなイ

すぎさツたわが子をばかなイことヨといふやうに

たら　ちねの　あゞに　のこりて　ふえたけの
よにハゑられぬ　ねこそなかるれ」　ねこそ
なゐるれ　新千載集

此の歌ゞも、如此言を切りて書けるハ、曲節拍子の分ちを、速く知らゝ、ゆむゞてなり。ふしづけハ、皆、上ふ從ひて歌ふべゝ。以下これ准へ

子

だの　むべき　すゑはの　つゆを　さきだて、
のこるわがみぞ　おきゞころなき」　おき
ゞころなき　新千載集
はか　なゝゞ　いふにも　いゞゞ　なみだのみ

も、なみだの、そでにかゝるバかりの、この世であるものを、それどハゝらずだのみにおもツて、わかることヨ

ひとゝれずかなゝイ、ものおもひをゝタことも、あツタけれども、がゝゆイ子にわかれタほどがなゝイとハなイワイ

きみとわれとハ、さきにたつマイおくれマイどだがびにおもひヤツてゐタ、そのかびもなイこのわかれカイナア

おあひまウすことも、いまハならなイゆゑに、たひなきながらねタ、そのよゆめにおみえなきれタが、ゆ

かゝるこのよを　たのみけるかな」　たのみ
けるかな　新古今集
ひゞ　ゑれず　ものおもふ　をりも　ありゝの　ゞ
このこゞバかり　かなゝきハなゝ」　かるゝき
ハなゝ　詞花集

夫

さき　だゝト　おくれドゝ　ゞこそ　おもひゝか
ちぎりゝかひも　なきわゐれかな」　なき
わゐれかな　新千載集
あふ　こゞも　いまハ　なきねの　ゆゑならで
いつかハきみを　またいみるべき」　またハ

めでなくーてハまたいつかおあひまウすべきことをカイそれハなるマイ

きみにわかれてよりはやぶくのはての日になりたれども、ヤツパりこひーーーことのかぎりがなイゆゑにこれがばての日ともおもハれなイ

みるべき　新古今集

わあ・れふー　わぎを　はてぎも　おもほえず
こひーきこぎの　かぎりなけれべ」　かぎり
なけれバ　後撰集

婦

かく　のみに　ありける　ものを　いもゝわれも
ちぎせのごぎも　たのみたりける」　たのみ
たりける。万葉集

われとつまとハこのヤウにみトカイちぎりであッタものを、それとハーらず、たがひに、千年もかウーてゐられるものゝヤウにたのみヤツてゐタワイナア

つまのこに、いまさらにぶたゝびあふべきヤウもなイゆゑに、あさのとりのとく、なきになイてゐるとヨ

あさ　ぎりの　なきのみ　なるむ　わぎもこに
ゐまゝたさらに　あふよーをなみ」　あふ
よーをなみ　同

ゆく　へなき　たまの　をぐーも　かたみふて
なちそのかみを　わすれわびぬる」　わすれ
わびぬる　新後拾遺集

兄弟

せを　せけバ　ふちぎ　なりても　よぎみけり
なぞれを　ぎむる　ちぎらみぞなき」　ちぎらみ
ぞなき　古今集

おも・へなゞ　つらぬし　えだめ　くちはて、
たのむかひなく　なれるなげきを」　なれる
なげきを　新拾遺集

おく　れても　かつ　ゐつまで　ぎ　みをぞおもふ

たまーひのゆきがなもーれずなッタつまのこーておイタ王をかざッタくーもいまかたみとなッて、なほくすぎッタそのときをおすれかねておもひなやむことヨ

せをも、せきとめれバふちとなりてよどむこともあるものヂャワイ、みづのながれてかへらぬごとく、人のなりゆくをとむるーがらみハなイことカイナア

きみとわれとハつらなッタえだのごとく、たのみヤツてゐタであッタがいまハそのひとえだがくちてシマッてたのむかひなくたゞなげきばかりのごッタワイ

きみにおくれたれどもつ

れはわかれタかりのごとくおれもおツつけゆくワイしつまでもかウーてるヤウとハおもハなイ

つらにあゐれー　あきのかりがね」　あきのかりがね　風雅集

此の歌ぞもハ、其の事に當りたる靈祭にハ、其ふ合へる歌を、主ぞーてうたひ、附けてハ、上に擧げたる歌ぞもを、隨意にうたふべきなり

祖靈祭

これハ、春秋二季の祭を始め、總べて、先祖の祭をいふ

歌ハ、神祭の歌を用う。（例ぞ歌、神歌、祭歌、願歌、定歌等の歌ぞもなり）

但、祭歌ハ、首の、かみ。まつる。の五字をた。ま。う。る。改へてうたふべし

凡、皇國の人民ハ、神孫ならざるものハ、一人もあるべからず。然れバ、瓜の子ハ茄子にならぬぞいふ、諺の如く、神孫たるものハ、神にこそ成れ。他物になるぞいふ道理ハ、曾て無きこぞなり。諸家の先祖も、此の世を去りての後ハ、皆、神に成りしこぞ疑ひなし。各〻其の意を得て、修行すべー

此の篇ハ、專、神祭、靈祭に係る古歌を集錄ー、婦人童子の解り易からむ爲に、通俗の詞をもて頭注を加へたり。然れバ、其の頭注によりて、諸歌の意を知り、古の人の誠心の篤かりー事をも辨ふべくまた、此のふーづ

けによりて、音の高低、聲の長短、曲節拍子のやうをも覺り、平素にうたひ試み、其の事に練習して、成るべくハ、美しく歌ハむ事を要すべし。然して、誠意を先ずして修行せむにハ、神明も樂しゝ所聞食し、靈魂も嬉しゝ聽き賜ふべし。さてこそ、其の愛惠をも被りて、此の世にしてハ、無事平安を得、後の世にしてハ、安樂自在の神域に入りて、正しき神列ふも加りぬべけれ

神教歌譜終

附錄

本篇、既に成れり。門人等曰く。此の書、神祭靈祭に止れるハ、少不足ぬこゝちし侍り。なほ、教訓ゝなるべき歌ゝもを取加へて、何に限らに、衆人會集せる席にてハ、廣く施行せらるべく、ものしてゝ乞ひ出でたり。予も亦、其の意なきに非ざれバ、即、其の類の歌ゝもを、思ひ寄る隨に取出でゝ、此に附錄に

神祇歌

あま　つかみ　くにつ　やしろを　いはひてぞ
わが　あしはらの　くにハ　をさまる」

天つ神のやしろ、國つ神のやしろをいはひまつりてぞわが日本ハよくをさまるデアラウ

をさまる　風雅集

あま　つやーろ　くにつ　やーろ　わかれても
まこ　ゝをうくる　みちハかハらド」　みちハ
かハらド　同

天つ神のやーろ国つ神のやーろとわかれてあッても、神のまことのおめぐみをうくるみちにかはることハあるマイ

かみ　こそハ　のをも　やまをも　つくりおけ
ひゝにまこ　ゝの　みちをふゑゝて」　みちを
ふゑゝて　夫木集

世の中の人に、だーイまことのみちをおませヤウとて、そのみちのある、野をも山をも、神のおつくりおきなされタデアラウ

此の歌ゝも、本編の歌のふーづけに従ひて、末の一句を返ーて歌ふべー。以下皆、これ小倣へ

國體歌

あゑ　つちの　ひらけー　ゝきゆ　ちはやぶる

天地のひらけタときより

かみのみくにゝ　いひはドゑけむ」　いひはドゑ
けむ　新拾遺集

ちハやぶる　神国とハいひはトめタデアラウ

ひさ　かたの　あゑより　おろす　たまおこの
みちあるくにぞ　いまのわがくに」　いまの
わがくに　續古今集

いざなぎ、いざなみの神の、ひさかたの天上よりたまぼこをおさーおろーなされタときより、だーイみちのつたはッてあるくにハいまのわが日本ヂヤワイ

もろ　こーの　よゝハ　うつれゝ　ゝきーまの
やまゝーまねハ　ひさーかりけり」　ひさー
かりけり　夫木集

外国の、世、の国王ハ、ときくにうつりかはることなれども、ゝきーまのわが日本のおほぎみハいつもかはらずひさーくまーますことヂヤワイ

君臣歌

よ　をさまり　たみ　やすかれゝ　ゝのるこそ
わがみにつきぬ　おもひなりけれ」　おもひ

世の中よくをさまり、下方民もこゝろやすくあれかしーといのるがあめのーたのきみたるわが身につき

なイおもひヂヤワイ

ドウシタナラバ、月や日と、おなじこゝろでくものうへよりこの世の中のものがやみぢにまどはなイヤウにでらされるダラウ

つくバ山のあなたこなたにふかきかげハあれども、おほぎみのおめぐみのおんかげにまさるかげハなイワイ

たとひ山ハざけてシマイ、海ハあさくなッテシマウ、世の中になッタトテもきみにたいして、ふたごゝろをもつことのあらウカイ

なりけれ　續後拾遺集

いの　にせバ　つきひ空　おなじ　こゝろにて
くものうへより　よをてらさなむ」　よを
てらさなむ　聖廟法樂和歌集

つく　ばねの　この　かのもに　つげハあれど
きみぞみかげに　ますかげハなし」　ます
かげハなし　古今集

やま　ハさけ　うみハ　あせなむ　よなり空も
きみにふたごゝろ　わぞあらじやも」　わが
あらじやも　新勅撰集

父子歌

松のみばえのふたばのごとき、わが子のよハひをながれいとおもふにハけふが千年のひぞへけドもヂヤワイ

ソノ意明カナレバ注セズ

われも人の子のおやとなッタラくにおもへバわがおやのわれをうみそだてくくだされタそのおもひのほどもよくおもひしられるワイ

よイきのはしらをほめたてゝつくッタでてんのいつまでもかハらずきかえるヤウに、わが母もいまの

ふた　バより　まつぞ　よハひを　おもふにハ
けふぞち空せの　はゞじなりける」　はゞじ
なりける　續古今集

ちろ　かねも　こがねも　たまも　なにせむに
まされるたから　こにしかじやも」　こに
ちかじやも　万葉集

ひ空　のこの　おやに　なりてぞ　わがおやの
おもひハ空ば　おもひはらるゝ」　おもひ
ちらるゝ　新千載集

まき　バしら　わじて　つくれる　空のゝご空
いませはゝ空ど　おもがハりせば」　おも

ま人かはかたちもかはることなくおいでくだされ

なにはの人のあしびをたくいへのヤウにすくけてハあるなれどもおのがつまがせいつでもめづらしイワイ

住吉の神まつりの人のあつまるところにいでゝさだかにおのがつまをさへかゞみのヤウにうるハしくみタワイ

おはぶねのごとくふたつなくおもひたのンでゐるきみゆゑにおがあさゆふつくすこゝろハずこゝもをしイとおもハなイことヨ

がハうせば　万葉集

夫婦歌

なに　はびゝ　あしびの　たくやの　すしたれゝ
おのがつまこそ　ゝこ
ゑづらしき　万葉集
すみ　のえの　をづゑに　いてゞ　うつゝにも
おのづますらを　かゞみゝ　かゞみゝ
みつも　同
おゐ　ぶねの　おもひ　たのゑる　きみゆゑに
つくすこゝろハ　をしけく
もなし　同

ありそこえ　ゐかゆく　なみの　ゐあでゝろ
われハおもハド　いのちしぬゝ　いのち
しぬゝも　同

兄弟歌

のき　ちのき　たけの　そのふに　よゝのかぜ
つらなるえだを　ふきぞつたへむ　ふきぞ
つたへむ　新千載集
いふしへも　たぐひハ　あらト　わおやゝに
えだをつらぬる　かしハぎのかげ　かしハぎ
のかげ　玉葉集

朋友歌

あちいそをそえてほかへゆくなみのヤウにハかでゝろハたとひいのちハしぬとも、われハおもひハすマイ

やどちかきところにそのの竹のごとくつらなゾてゐるコなれバおがが代〻の家風をふつたへて、おなトヤウにあさゆふをすぐしタイモノヂヤ

わがやどに柏木のえだをつらねタヤウにニハンで兵衛の官にのぼッそゐるとしふことハいにしへにもかぐひハあるマイとおもハれるワイ

かゝてゝいろのあツタどうしゝちよツてかたりやツてゐる夜ハ[からにーき]たツてゆくのもをしくおもハれるものヂヤワイ

世の中にうれーゝことハ、さまゝゝあらウなれども、まことにうれーイものハ、こゝろのあツタどうゝ花をみて日をくらすてゝろヂヤワイ

めづらゝけさうまれ夕、つるの子のヤウナこの子に千年もとらはふてうぶぎのむゝぎをかさねてきするからハ、千年の正月もかさねるダラウカイナア

このうまれ夕子もまた千年もながくめでたイけーきが、あきらかにみえるワイおひそハリタ松のふたバのヤウナみどりごながら二ハ

けふはトめてかみをゆふ、そのもとゆひのいろのむらさきを成人のゝちにハーやうぞくのいろにうつれかーとおもふことヨ

おやゝゝハもちろんちゝばゝまでうちよツていはふデアラウされさとのげんぶくする子の千年のさかえのはじめおるひやられるワイ

わが稲田姫と二人ゝからむためにみやをつくらう

おもふ　ぞちま　ぞるせるよハ　かちにーき
たゝまくをーき　ものにぞありける」　ものにぞ
ありける　古今集

よの　なかに　うれーき　ものハ　おもふぞち
はなみてくらに　こゝろなりける」　こゝろ
なりけり　拾遺集

誕生賀歌

色づ　らしく　けふたち　そむる　つるのこハ
ちよのむづきを　かさぬべきかな」　かさぬ
べきかな　詞花集

これ　もまた　ちよの　けしきの　ーるきかな

おひそふまつの　ふたばながらに」　ふたば
ながらに　後拾遺集

元服賀歌

ゆひ　そむる　はつ　もぞゆひの　こむらさき
ころものいろに　うつれぞおもふ」　うつれ
ぞおもふ　拾遺集

かた　がたの　おやの　おやぞち　いはふぞり
このこめちよを　おもひこそやれ」　おもひ
こそやれ　後拾遺集

婚姻賀歌

やく　もたつ　いづも　やへがき　つまごぞに

とするにこゝろあッてか、しく〳〵もくものたちこめてやへがきをつくるそのやへがきワイナア
此ハ素戔嗚尊ノ大御歌ナリ

さね川のほとりのあーはらなるいやーきい〳〵にきれいにすがだゝみをーきつめて、わがいすきとり姫と二人ならンでねタワイ
此ハ神武天皇ノ大御歌ナリ

ねてもおきてもわがおはぎみのごとゆみやうる矛年もとねがひマスレドモ、それハ人の力にハ及バなイことなれバならず神のおんう〳〵にてさのごとくおはからひなされるデアラウ

天つ神、国つ神のおたちなさるこのくにになるゆゑに、わがおはぎみもいつまでも〳〵おさかえなされるダラウ

わがきみへかのこまかナしーのダン〳〵そだッて、いはとなッてそれにこけのはえるまで千万年も世にながくおいでなされませ

大海のなまのかずかきりもなくまさごをかぞへて井きみがながいきのとーのかずにシマシヤウ

このごてんへけにとみさかえてあらッシャルワイ、のきづまをさきくさの三つ四つにつゞけておつ

やへがきつくる　そのやへがきを」　その
やへがきを　古事記
あーハらの　ゐげこき　をやに　すがだゝみ
いやさやーきて　わぎふたりね」　わが
ふたりねし　同

御世壽歌

ふーて　おもひ　ねてもぞ　おもふ　よろづよハ
かみぞーるらむ　わぎきみのたゑ」　わが
きみのたゑ　古今集
あゑ　つちの　かみの　たもてる　くになれバ
ゆゑきハかきハに　きみぞさかえむ」　きみぞ

さかえむ　續後拾遺集

高年賀歌

わが　きみハ　ちよに　やちよに　さゞれいーの
いはゐゆゑなりて　こけのむすまで」　こけの
むすまで　古今集
わだ　つみの　はまの　まさごを　かぞへつゝ
きみがやちよの　ありかずにせむ」　あり
かずにせむ　同

新室壽歌

この　ゆゑのハ　うべも　ゆゑみけり　さきくさの
みつバよつばに　ゆゑのづくりせり」　ゆゑの

くりなされて、アゝけつこうナぐぶーんヂャ

すゝきがやをもツて、やねをふきぐろ木といツてがはのつイタまゝの木をもツて、古風につくツタ長屋王のごてんハ、万年までもめでたくさかえるデアラウ

此ハ元正天皇ノ大御歌ナリ

てきにむかツて、太刀のーのぎもうちはなすほどのつよイおのどのいはツてのむめでたイみきに、われもおほきにおウタワイ

うめのはなをさかづきにうかべてこゝろのあツタどうーのみつくーてのゝちハ、モウハヤちッてシャッてもよイハナ

づくりせり　古今集

はたすゝき　をばなさかふき　くろきもて
つくれるいへハ　よろづよまでに　よろづ
よまでに　万葉集

宴會歌

やきたちの　かぶ　うちはなす　ますらをの
わぐぶよみきに　われ忍ひにけり　われ
忍ひふけり　万葉集

うゑのはな　さかづきに　うけ　おもふぶち
のみてのゝちハ　ちりぬぶもよ　ちりぬ
ぶもよー　同

くさまくらたびにたツてゆくきみがいへにかへるまでゝあまつかみゝにつかみもさいなゝへのなイヤツにおたすけくなされませ

きみとゝもにいきタクおもへどもこの身をわけてやることがならなイから、目にみえなイこゝろをきみにそへてやるゾイ

きみハ王にてもあれかゝ、王であツタならゝわが手にまイてもツていて、それをみて、たのゝみながらたびもーヤゥものおおーていッタならゝぶーくおもハれるダラウ

いまかれてくものあなた

送別歌　留別

あゑつちのかみも　たすけよ　くさまくら
たびゆくきみぶ　いへにいたるまで　いへに
いたるまで　万葉集

おもへぶもみをー　わけねバ　ゑにみえぬ
こゝろをきみに　たぐへてぞやる　たぐへ
てぞやる　古今集

わがせこハ　たまふもがもな　てふまきて
みつゝゆかむを　おきていあバを　おきて
いかバをー　万葉集

かぎりなき　くもゐのよそに　わかるぶも

の、かぎりなくとほイくに（ゆくことヂヤが、こゝろのうちぞ（きみたちをおとにのこしておかウカイ、ドコマデもいつしよにづれていかウとおもふワイ

男子としてハ千年のうまでも世の中の人の、いひつぐはどのいさまーイ名もたてずーてウカ〳〵となにごともせずーておべきものでハなイ

おほぎみの、みけとあるわれも、天地のごとくさかえるみよに、あへるをおもへべかウーていきてゐるかひがあるワイ

とかく人、くれなゐのヤウに、はなやかなるものをめづらーがるものヂヤが、それハやく、いろのさめるものヂヤワイそれよりもヤッパリドングリなど

ひゝをこゝろに　おくらさむやハ」　おくら
さむやハ　古今集

雑歌

をの　こやも　むなし　かるべき　よろづよに
かたりつぐべき　なハたてずして」　なハ
たてずして　万葉集

みたみ　われ　いける　ゐるしあり　あをつちの
さかゆる　ゝきに　あへらく　おもへバ」　あへらく
おもへバ　同

くれ　なゐハ　うつろふ　ものを　うるばみの
なれふしきぬふ　なれしかをやも」　なれ

でそめ久きなれ久きものが、いつまでもかはることがなくてよイワイ

世の中のすべてのものハ、あたらーイがよイ、たゞ人ばかりハ、ふるーイのがよからウと、おもハれるワイ

きみにたいーてハ（あさかやまかげさへみゆるやまのゐの）あさく、そうやくなく〳〵ろハ、わがうへにてハ、おもひマセウカイ、けッーてそのヤウナことハいたしマセヌ

仁徳天皇のなにはのたかつのみやにおハ―まーてこのはなの（ふゆごもり）オアいまハはるヂヤとききかけるヤウにおさかえなされるオテモヘありがたイことヂヤ

いつはりといふことのな

しかをやも　同
もの　みなハ　あたらしき　よし　たゞひゝハ
ふりたるのみし　よろしかるべし」　よろし
かるべし　同

あさ　かやま　かげさへ　みゆる　やまのゐの
あさきこゝろハ　わがもハなくに」　わが
もハなくふ　同

なに　ばづに　さくや　このはな　ふゆごもり
いまをはるべゝ　さくやこのはな」　さくや
このはな　古今集

いつ　はりの　なきよ　なりせバ　いあばかり

イ世の中であツタならバ、ドノヤウに人のいふことバがうれーからウッ

よーやうき名がたツても、けツーてなイことヂヤと、人にハいッておかウさてそれをよイもわるイも志ツてゐるわがこゝろがもードウヂヤッとたづねタならバつゝみかくすことハできマイそのときにハなンとこたへタものであらウ

ひゞのこゞのは　うれしからまし」　うれし
からまし　同
なき　なぞゞ　ひゞにハ　いひて　ありぬべし
こゝろの　ゞは　いかゞこたへむ」　いかゞ
こたへむ　後撰集

長歌

このみきハ　わがみき　ならず
くしのかみ　ゞこよに　いまに
ゞはたゝす　すくな　みかみの
かむはぎ　はぎ　くるはし
ゞよはぎ　はぎ　もゞはし

これまでもたてまつりきたる多みきゞヤはどにだくさんにめーあがりませザアく、

このみきをかもーてつくツタひとハ、

みきをつくるうすのはーにづドみをたてゝおいて、そのつゝみをうちながらうたをうたツたりまひをまッたりーていはッてかもータデアラウカ

イ、このみきのゞウさウやウモーらず

サテモ〳〵だのーイことヂヤはどにばやウめーあがりませザアく

まつりこし　みきぞ　あさず
をせさゝ」　をせ　さゝ　古事記

此の歌ハ、末の二言を延べて、歌ふべし。次も同じ

このみきを　かみけむ　ひゞハ
そのつゞみ　うすに　たてゝ
うたひつゝ　かみ　けれかも
まひつゝ　かみ　けれかも
このみきの　あやに　うた
たぬしさ」　たぬし　さゝ　同

此の二首ハ、酒樂（さかほがひ）の歌なり。何の席にても、酒を賜るゞきにうたふべし

つきたてタこの新宅のつなのごとくながくさかえるぎまハ、　先ごの、つきたてタはークのふとくシツカリとータノハこのいゝのあるトのお心のーづまりヂヤ

とうあげタむねうつばりのたかくはりわたツタノハ、　いゝのあるトのお心のさかえヂヤ

とうおイタたるきのほどよくならンダノハいゝのあるトのお心のとゝのひヂヤ

とうおイタこまい竹のたひらによくならンダノハいゝのあるトのお心のたひらぎヂヤ

ゆひかためタつなめ（今ノサシクチ）ハいゝのあるトのおいのちのかためヂヤ

つきたつる　わかむろ　つなね
つきたつる　はしらハ　この
いへぎみの　みこゝろの　ゐづまりなり
むねうつハりハ　この
むねうつハりあぐる　はやしなり
みこゝろの　この
いへぎみの　はへぎハ　ゐゝのひなり
みこゝろの　この
ゐちりおける　えつりハ　たひらぎなり
みこゝろの　この
いへぎみの　つなめハ　かたゑなり
ゐちりむすべる
いへぎみの　みいのちの

とうふイタかやのあつくかさなツタノハいゝのあるトのごふツきのあまりヂヤワイ

アノくものでタヤウにみえるハ、新田ヂヤワイ

その田のどつかみもあるしなばを米にしてさかゞめにてかもークみきを

うまく、十分におのみなされ

わが人ゝ

ゐちりふける　かやハ
いへぎみの　み ゐちみの
いづもハ　にひばり
にひバりの　ゐつかの
さらけに　かゑる
うまらに　をやらふ
わがひこびゐたち　わがひこ　びゐたち　日本紀

此ハ、室壽（むろほぎ）の詞なり。素（もと）より、歌にハあらざれゐも、最（いと）もゝ感（めでた）き詞にて、新宅祝（たくなほ）の席（せき）なゐにハ、最（もと）も宜し、かるべけれバゐて、取り出（だ）でつ。然（さ）てこれハ、中段下段ふゑるせる詞の中ふハ、五言、六言、また、七言なる

この
あまりなり
おり
いねのは
おはみきを
がね

さへありて、常の長歌ぞは、大く異なるが如し。然れども、皆ふしを促へて、四言ふうたへば、同じやうふ、うたはるゝなり。試みおくべし

天地のわかれタときよりかむさびて
神めきて、たかくたツとイする
するがの国なるふドの山を
あまのハら
おほぞらたかく、はるかに見やれバ
わたるひの
そらをわたる日のかげさへもかくれ
てるつきの
そらにてる月のひかりさへも見えナイ
あらくもゝ
そらゆくくもさへも、自由にハゆかれなイ
ゆきゝくぞ
ソシテまたいつといふときなくゆきかふツてゐる

あへつちの　ゆきゆ
わあれし　たふゆき
たゝのく　たかねを
ふじのし　みれば
ふりさけ　ゐくろひ
ゐげも　みえず
ひかんり　はゞゐり
いゆき　ふりける
ゆきハ

ワイ、このヤウナ、たツとくめでたイ山をバ、そのまゝに見すぐすべきでハなイ、いつまでも、いひつぎかたりつイでゆくヤウにータイものヂヤ

やすみ〳〵　わがおほぎみ
たかひかる　わがひのみこの
おうまをのりならべてかりにおいでなされるその
わかこもを　かりぢのをの
に
鹿ハばひをガンでゐ
うづらハ、はひまハッてゐる
その鹿のヤウにばひをガみ

のたりつぎ　いひつぎ
ふじのたかねは　ふじの　たかねは　ゆかむ　万葉集

此の歌ハ、婚禮、其の他、總べて、祝賀の席ふて、專うたふべきなり

やすみしゝ　わが　おほぎみ
たかひかる　わが　ひのみこの
うまなめて　みかり　たゝせる
わかごもを　かりぢの　をぬに
ゑゝこそハ　いはひ　をろがめ
うづらこそ　いはひ　もゆれ
ゑゝじもの　いはひ　をろがみ

うづらのヤウにはひまハツて
おそれつ〜んで、おつかひまウーて
ひさかたの 天をみるごとく
まそかゞみ あゐぎたツとンでおみあげまウせども
はるくさの いやまーにめづらーイ
わがおほぎみであらッシャルワイナア

ふみをみるなら、よく見わけるがよイ、わがみ国にハなイからぐにのもドばかりみるが、人のみちであらウカイ、それよりもまさツて、たッとイみちがあるワイ

ひだ〜くみほめてつくれるまきばーらのごとく、つきたッタ、わが心のはーらハドコマデもうどかすことでハなイ

ーきーまの やまとでいろといふもの（いかなるものぞと、人がたづねタならバあさ日にてりあゐまざくらのはなのヤウニかツハリとーていさぎよイものヂャとこたへるでアラウ

わがおほきみのみちハだゞひとつようほかにハなイ、人とあるものハ、このみちをおイてほかのこみちによるべきものでハなイハナ

うづらなす いはひも守り
かしこみ守 つかへ まつりて
ひさかたの あゐみる ご守く
まそかゞみ あふぎて みれ守
はるくさの いや めづらしき
わがおほぎみかも 「わが おほぎみかも」 万葉集
此の歌ハ、時宜に従ひて、何の席ふても、うたふべきなり

四大人歌

ふみ わけよ やま守ふハ あらぬ から守うの
あ守をみるのみ ひ守のみちかハ」 ひ守の
みちかハ 荷田大人
ひだ たくみ はゐて つくれる まきばしら
たてしこゝろハ うごかざらまし」 うごか
ざらまし 賀茂大人
ゐき ゐまの やま守 ごゝろを ひ守ゝハゞ
あさひふゝゐふ やまざくらばな」 やま
ざくらばな 本居大人
ずゐ らぎの みちたゞ ひ守つ こをおきて
あだしこみちふ よらゐやハひ守」 よらゐ
やハひ守 平田大人
この歌ハ、皇國の學問の先達なる、四人の大人等の

各々、其の志(こゝろざし)を述(の)べられたるものにて、人として、ハ、
あらでハかなハざる歌なり
此に錄(しる)せるものハ、人道(じんだう)の要(えう)とある歌ともを、彼此の
歌集より、摘(つみ)出(い)でたるなり。然れバ、平常(つね)に、讀(よ)みもし、歌
ひもして、其の義を會得(ゑとく)したらむにハ、自然(おのづから)、身(み)を修(をさ)め、
家(いへ)を齊(とゝの)ふる道(みち)をも得(う)べきものぞかし

附錄終

跋

雲[illegible]神社[illegible]人ハ、専ら
惟神の道を[illegible]、神[illegible]敬
ひ奉りて、皇神を祀り、祖先に事
へて[illegible]今更
言はずもあらじ。然るに世中昔
より[illegible]化道あれ[illegible]　教ふ相率り
相口會[illegible]あらぬさまに[illegible]候
[illegible]の[illegible]
口惜しき事にあらずや。吾が権田[illegible]
以[illegible]人々[illegible]て、其の敎

書又祭式其書等に一定の歌詞を定め諸神に
古代の歌謡を定め諸神に
神に対する祝詞、祖先を崇敬する意味
冠婚葬祭の儀式、或は
其の祀る所の神、服装、
行事、遊戯等に古代のみを尚ぶこと、
を表する祀の古歌を集めて、謹格に
頌徳に加ふる事、婦人童児等を
古人和歌を愛する
ゆゑに。於世。きこゆ。古代書、
世間廣久なる歌神祭の
道に山みまもる祀に教を相自
なる事なれども自身に元に
の歌を用ひ、祭神習ふ教
中のまし。この事なる
事を尚ぶこの義。此に元に樂に人後に
世を安んずるものは、祭神の恩に
教歌に廣和や義
明治十四年六月

惟少教正内海政雄誌

版權免許明治十四年一月廿五日
出版同十五年十二月十五日
定價三十錢

編述者 神奈川縣平民 權大教正 權田直助
相模國大住郡大山町
三百二番地居住

版權所有人 静岡縣平民 小西又三郎
伊豆國君沢郡三島駅
六百七十壱番地居住

弘通者 神奈川縣平民 内海政雄
相模國大住郡大山町

6
768

014158-000-1

6-168

神教歌譜

権田　直助／著

M15

ABB-0448